

表象メディア論B 栗原 詩子	履修年次	クラス	単位	学期
	2-4		2	後期
備考：				

【講義の概要】

【到達目標及びテーマ】

メロディーや映画の一場面のような「時間的なもの (objet temporel)」は、私たちの意識と同様に、「消えていく」ことを通して現れる。「消え方」は、それを生み出す人によって異なり、その作品のスタイルを決定していくが、同時にある対象の「消え方」は、経験する人によっても異なっている。

この科目では特に、ミュージックビデオに着目する。視覚的な部分のみならず、聴覚的な部分についても、分析的に語る方法を身につける。

【授業の概要】

時間・聴覚に焦点をあてた映画分析論の読解と、映画およびミュージックビデオの分析を、並行して行う。また、学院内で開催されるコンサートを聴取し、繰り返し視聴可能な映画やミュージックビデオのみならず、ライブで上演される時間体験について語る訓練をする。

【各回の授業内容】

- 第1回 スティグラーレ 『象徴の貧困』 (2004) レネ 『みんなその歌を知っている』 (1997)
- 第2回 メッツ 『映画分析のための方法論的提案』 (1968) メリエス 『月世界旅行』 (1902) ・ クロスランド 『ジャズシンガー』 (1927) ・ ケリー 『雨に唄えば』 (1952)
- 第3回 オーモン 『映画理論講義』 (1983) エイゼンシュテイン 『戦艦ポチョムキン』 (1925)
- 第4回 シオン 『映画にとって音とは何か』 (1985) エイゼンシュテイン 『ストライキ』 (1924) ・ スピルバーグ 『マイノリティ・リポート』 (2002)
- 第5回 シオン (つづき) ヒッチコック 『サイコ』 (1960) ・ 溝口健二 『山椒大夫』 (1954)
- 第6回 シオン (つづき) クレール 『パリの屋根の下で』 (1930) ・ プレソン 『抵抗』 (1956)
- 第7回 Carson, "music video" Encyclopaedia Britannica Online ビートルズ 『ア・ハード・デイズ・ナイト』 (1964) ・ クイーン 『ボヘミアン・ラプソディ』 (1975) ・ バグルス 『ラジオ・スターの悲劇』 (1979)
- 第8回 Carson (つづき) マイケル・ジャクソン 『ビート・イット』 (1983) ・ 『スリラー』 (1984)
- 第9回 Carson (つづき) マドンナ 『ライク・ア・プレイヤー』 (1984) ・ 『チェリッシュ』 (1989) ・ 『ジャスティファイ・マイ・ラヴ』 (1990)
- 第10回 Carson (つづき) ニルヴァーナ 『スメルズ・ライク・ティーン・スピリット』 (1991) ・ R.E.M. 『ルージング・マイ・レリジョン』 (1991)
- 第11回 Bjoernberg, "video" The New Grove Dictionary of Opera, Oxford University Press, 2007 デイズニー 『ファンタジア』 (1940) ・ レジェ 『Ballet mecanique』 (1924)
- 第12回 マクルーハン 『メディア論』 (1964)
- 第13回 ドブレ 『メディアロジー宣言』 (1993)
- 第14回 オライリー 『Web2.0とは何か』 (2005)
- 第15回 コンサート・レポート

【テキスト】

大学生協にてワークブック『表象メディア論B』（予価1000円）を入手すること。

【参考書等】

- ・ J.モナコ 『映画の教科書』 フィルムアート社, 1983.
- ・ 西村雄一郎 『巨匠たちの映画術』 キネマ旬報社, 1999.
- ・ オーモン 『映画理論講義』 勁草書房, 2000.

【成績評価の方法】

以下の2課題により成績評価を行う。

1. コンサート・レポート (25点)
2. 映画またはミュージックビデオに関する分析レポート (75点)

〔履修上の注意〕

(1) 授業中に提示する音響資料は、個人の復習のために録音が可能ですが、貸与やダビングの要請には、応えられません。

(2) 「コンサート分析」の実習の一環として、福岡市近郊で開催されるコンサートの見学が必要です。入場料は自費負担(学生料金で1500~2500円)です。